

Title	ウィリアム・クラーク卿手書き文書（マニユスクリップツ） （1640～1664）への手引き（翻訳）
Author(s)	松谷, 好明
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.29, 2004.3 : 244-275
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4146
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

ウィリアム・クラーク卿^{マニユスクリプツ}手書き文書(二六四〇—一六六四)への手引き(翻訳)

松谷好明 訳

訳者による序

聖学院大学図書館が所蔵するマイクロフィルムの中で、近代イギリス史に関する限り最も貴重なものは、本紀要の前身で紹介したいわゆる「トマソン・コレクション」であるが、それに次ぐものがこの「ウィリアム・クラーク卿手書き文書」(略称、クラーク文書)である。一七世紀中葉、イングランドが内戦、「革命」、共和制、王政復古という大変動を経ているとき、議会および軍の中枢にあつた人々の近くにあり、単に秘書官として義務を果たしたというだけでなく、膨大な文書、手紙、記録を筆写、メモ、速記し、後世に残した人物、それがウィリアム・クラークであつた。

クラークが残した手書き文書や書物、文書のコレクションは、後述のような過程を経て今日に至っているが、そのうちの手書き文書は、ようやく一九世紀中葉になつて整理が進み、目録が作成されるとともに、文書の一部が編集され、一九世紀末に刊行されるに至つた。それが、一八九一年(第一部)と一八九四年(第二部)に Camden Society から出版されたファース(C. H. Firth)編の“The Clarke Papers — Selections from the Papers of William Clarke”である。この本は、一九九二年、ウールリッチ(Woolrich)による新しい序文を付して Royal Historical Society から一巻本として再

- ⑬⑧ 口語訳では「あなたがた、」は欠落する。
- ⑬⑨ 口語訳では「快く」となる。
- ⑭① 口語訳では「僕であれ」となる。
- ⑭② 口語訳では「それに相当する報いを、それぞれ主から受けるであろう」となる。
- ⑭③ 口語訳では「僕たち」となる。
- ⑭④ 口語訳では「彼らとあなたがたとの主」となる。
- ⑭⑤ 口語訳では「兄弟たちよ」は欠落する。
- ⑭⑥ 口語訳では「神の武具で」となる。
- ⑭⑦ 口語訳では「支配と、権威と、やみの世の主権者」となる。
- ⑭⑧ 口語訳では「天上にいる」となる。
- ⑭⑨ 口語訳では「よく抵抗し、完全に勝ち抜いて堅く立ちうるために、神の武具を身につけなさい」となる。
- ⑮① 口語訳では「正義」となる。
- ⑮② 口語訳では「救」となる。
- ⑮③ 口語訳では「絶えず祈と願いをし、どんな時でも御霊によつて祈り、そのために目をさましてうむことがなく」となる。
- ⑮④ 口語訳では「大胆に」は「福音の奥義を」の前に置かれる。
- ⑮⑤ 口語訳では「この福音のための使節であり、そして鎖につながれているのであるが、」となる。
- ⑮⑥ 口語訳では「しかし」は欠落する。
- ⑮⑦ 口語訳では「主にあつて忠実に仕えている愛する兄弟テキコが」となる。
- ⑮⑧ 口語訳では「愛わらない真実」となる。
- ⑮⑨ 口語訳では「恵み」となる。
- ⑯① 口語訳では「アアメン」は欠落する。

版された。

かくして一九世紀末に刊行されたファース編の『クラーク文書』の中に、イングリランド史上有名な、いわゆる「パトニー討論」の記録が含まれていたため、二〇世紀にはウィリアム・クラークの残した手書き文書の存在が広く知られるようになり、またイギリスの専門家による解説、研究が続けられてきた。しかし、その作業は今日でもなお進行中であり、クラーク文書については未開拓の分野が多いと言わなければならない。

ところで、一九九九年、聖学院大学出版会から、大澤麦・澁谷浩訳『デモクラシーにおける討論の生誕——ピューリタン革命におけるパトニー討論』が出版された。訳者らが底本として用いたのは、ウッドハウス (A. S. P. Woodhouse) 編の "Puritanism and Liberty——Being the Army Debates (1647-9) from the Clarke Manuscripts with Supplementary Documents" (1950²) である (1938¹)。ウッドハウス編のこの書物の中に、ファース編『クラーク文書』から「パトニー討論」が抜き出され、第一部として納められている。そこで『デモクラシーにおける討論』の訳者の一人、大澤麦氏は、訳者序論として、「ピューリタン革命における『パトニー討論』——その背景と政治思想的意義」と題する卓越した論文を書き、その中でウィリアム・クラークその人と彼の「クラーク文書」について背景と意義を簡潔、的確に描いている。

その序論の1. 「クラーク文書について」の末尾に、大澤麦氏はその節の結論として次のように記している。

ところで、ファースやウッドハウスの手によって刊行されたのは、「クラーク文書」四七巻のうち「パトニー討論」を含む一巻に過ぎなかった。その意味で、一九七九年のエイルマーの編になる「クラーク文書」全体を覆い尽くすマイクロフィルム版の刊行は、近年における大きな業績であると言つて良い。また、継続的に行われてきたクラークの速記の解説作業はE・サムズによる画期的な仕事を受け継いだオックスフォード

大学ニュー・カレッジのF・マクドナルドによって精力的に遂行されており、今や、「クラーク文書」の全貌がようやく明らかにされようとしている。こうした貴重な研究成果が従来のピューリタン革命史をどのよ
うに修正していくのか、今後の行方が大いに期待されているところと言えよう。(同書二一頁)

ここに言及されている「マイクロフィルム版」の「クラーク文書」こそ、本小論の冒頭に紹介した「ウィリアム・クラーク卿手書き文書」そのものである。このマイクロフィルム版は、ハーヴェスター・マイクロフォーム出版社(Harvester Microform Publications Ltd)から一九七九年に刊行された。編集指導に当たったのは、当時オックスフォード大学セント・ピーターズ・カレッジ学長で、*“The Interregnum: The Quest for Settlement 1646-1660 (1972)”*の編者としても知られるエイルマー(G. E. Aylmer)であった。ハーヴェスター社は、マイクロフィルム版刊行に当たり、その使用手引きとして“*Sir William Clarke Manuscripts 1640-1664*”という四五頁からなる小冊子を発行した。それが以下に訳出する『ウィリアム・クラーク卿手書き文書(一六四〇—一六六四)への手引き』である。

この小冊子は、著者がB. P.とだけあって著者不明の序文と、I. 編集者G・E・エイルマーによる序論、II. エリック・サムズによる「ウィリアム・クラーク卿の速記」という小論、III. 内容と照合表とから成るが、ここではIIを除いて訳出する。なお、エイルマーによる序論には詳細な注が付されているが、一般には必ずしも必要ではないと思われるので省略することとした。

序 文

ウィリアム・クラーク手書き文書 (The William Clarke Manuscripts) は、一七世紀イングランドで個人が行った歴史的・一次資料の収集の中で、現存している最も重要なものの一つである。それらの文書は、一七世紀中葉の英国史の主要な分野について資料となるものを多数集めたユニークなものである。

G・E・エイルマー教授 (G. E. Aylmer)

この小冊子は、《オックスフォード大学ウースター・カレッジ所蔵ウィリアム・クラーク手書き文書 (二六四〇—一六六四年)》のハーヴェスター・プレス・マイクロフィルム版に添えるために作成された。含まれるのは、「I」G・E・エイルマー教授 (前・ヨーク大学歴史学教授、現・オックスフォード大学セント・ピーターズ・カレッジ学長) による、ウィリアム・クラーク卿とその文書を紹介する書き下ろしの長い序文と、「II」卓越した暗号解読者、エリック・サムズ博士 (Dr. Eric Sams) による、クラークの「秘密の記述」方法への手引き「本翻訳では省略」、および、「III」マイクロフィルム版の内容を読者に紹介する詳しい手引き、である。

クラークの速記を最近解読したものを付して、このようなマイクロフィルムの形でコレクションを公刊することは、極めて重要な内戦期のこの古文書を、学者、研究者が容易に利用できるようにする初めての試みである。エイルマー教授が指摘する通り、「これらの文書がすでに大いに用いられてきたことが、それらの歴史的価値と永遠的な魅力を証しする。しかし、コレクションの資料と潜在的なさまざまな用法が利用され尽くしたとは、到底言いがたい。……むしろ

ろ、将来の歴史家たちが、彼らの先人たちの仕事を一層良いものとし、新しい探究のさまざまな分野を全面的に切り開く基礎が提供されているのである。

本マイクロフィルム版は、オックスフォード大学ウースター・カレッジ図書館のウィリアム・クラーク文書全部を含む。編集者「エイルマー」と発行者「スピアズ」は、この版の製作、および、その準備期間中のご援助とご好意につき、ウースター・カレッジの学長、フェロー、研究者諸氏の親切な許可に対し、心から御礼申し上げる。本企画が始まった当時ウースター・カレッジの副図書館長であられたリチャード・セイス博士 (Dr. Richard Sayce) が、その完成を待たずに逝去されたことは、まことに残念である。編集者と発行者は、現在、同図書館の館長であられるレスリー・モンゴメリー女史 [Miss Lesley Montgomery] に対し、そのご援助と熱意すべてのゆえに、特に感謝の意を表す。現在の編集者が一九六七年、ウースター・カレッジ図書館でクラーク手書き文書の仕事に初めて手をつけたとき、彼はウィリアム・クラークとその手書き文書について、モンゴメリー女史よりもっと知っていただろう。それが「現時点の」一九七七年には、全く逆になっている。

編集者と出版者はまた、エディンバラのスコットランド国立図書館手書き文書部長に、4/7巻 (Adv. 35. 5. 11) の複製を、財務府 (チェッカーズ)・トラストに、4/8巻 (Chequers MS. 782) の複製を、親切にご許可くださったことに対し、御礼申し上げます。

R. B. 「だれであるか不明」

「1」 ウィリアム・クラーク小伝

この諸文書のコレクションに責任のある人は、彼自身、政治的革命期の特徴をよく現している。ウィリアム・クラーク（一六二三頃—一六六六）は、ロンドンで生まれたか、あるいは、幼くして首都に来て、そこで育ち、教育を受けたかした。彼は、一六四六年、法学院幹部の一人の引きで、特別扱いによりイナナー・テンプル法学院に入学を認められたようで、一六五三年、（当時スコットランドにいて不在だったが）弁護士になった。しかし、彼の経歴は、弁護士としてのものではなかった。クラークに特徴的だった、自分を目立たなくする慎重さ——それは多分、彼自身よりもっと偉大で、もっと献身的だった人々に対して、彼をかくも見事な秘書とし、「やり手」としたものの一部だっただろう——のため、クラークが二三、四歳までどのようにして生計を立てていたのか、確かなことは何も分からない。しかし、彼が富裕で余裕のある背景の出身でなかったことだけは、明らかである。そういう家庭であれば、学業を終えた息子たちの生活の面倒を見ていたであろう。はつきり分かっているのは、多分一六四五年のあるときから、一六四六年の間は間違いない、そして一六四七年の春に——イングランド史の重大な時期——クラークは軍の秘書官の一人だった。その前の何年間か、議会の事務局で働いていたかもしれない。彼自身の文書の中に、一六四〇—四一年の庶民院議事録草稿の一部や、一六四〇年代初めの、その他の議会文書が含まれているからである。一六四〇年代後半に、やはり軍の秘書官の一人で、それ以前、庶民院の補助書記（Under-Secretary）の一人だったジョン・ラッシュウースが、先輩の同僚であ

るとともに一種のパトロンであつたこと——クラークは後に、重要性と政治的責任の点で彼を追い越すに至るが——には、幾分証拠がある。

一六四七年から一六五〇年まで、クラークは議会軍の将官 (the General Officers) 付き秘書官の一人、特に (多分、彼の速記の技術のためであろう) 軍評議会 (the Army Council) の秘書だつた。この評議会は、一六四七年五月まで、更に一六四八年一月以降、實際上、士官会議 (the Council of Officers) だつた。しかし、一六四七年の後半の七ヶ月かそこらの間の特別な期間は、軍の総評議会 (the General Council) で、それには二名の選出された下士官と、他の二名の選出された兵卒——有名なアジテーター (Agitators) なしエイジェント (Agents) ——も、それぞれの連隊から参加していた。一六四九年、従来、騎兵隊中將で副司令官だつたオリヴァー・クロムウェルが、大將、総司令官としてアイerlandにいったとき、クラークはEnglandに留まり、共和国の総司令官 (Captain or Lord General) であるトマス・フェアファックス卿 (Thomas Lord Fairfax) の第二軍事務官に事実上なつた。フェアファックス自身の政治的な動機は、謎である。王政復古後に彼は、自己の無実を証明するため、クロムウェルやアイアトンといった、より有能でより冷酷な人々によつて操られた政治的愚か者として自らを描いた。一六四七—四九年については、これ (プラス、断続的な病氣、および、幾分虚弱体質の人だつたという事実) は真実かもしれないが、しかし、それは真実の全体ではなかつた。国王殺しに対する彼の不支持は本物であり、また、共和国への忠誠の宣誓を行うこと、あるいは、メンバーとして選出された、共和国の新しい国務會議に参加すること、を拒否はしたが、フェアファックスは、Englandの共和制が成立した最初の一年と三ヶ月の間、それに仕え続けた。共和国政府が、スコットランド人に対する先制攻撃について、一六四八年に起こつていたような、王党派——スコットランド側による侵入の再来の機先を制することを決めたときになつて初めて、フェアファックスは、一六五〇年夏、司令官を辞任したのだつた。そのときまでにはクロムウェルはEnglandに戻つており、フェアファックスを継いで大將、共和国総司令官の地位に就いた。そのときクラーク

は、難なくクロムウェルに仕えることに転じたように思われる。もしクラークがフェアファックス自身のように、クロムウェルに仕えるのを止めていなければ——そういうことはまずないように思われる——、クラークは、忠誠誓約エンゲイジメント「クロムウェル政府への服従誓約」を受け入れたに違いない。実際、彼の印刷本のコレクションから、クラークが国王処刑の際、断頭台上がっていて、恐らくチャールズが語ることをメモしていた証拠がある。いずれにしても、クラークは、クロムウェルと遠征軍に同行して北上し、ダンバーの戦いとエディンバラ占領の場にいた。しかし、クロムウェルが一六五一年夏、チャールズⅡとスコットランド——騎士党「王党派」のイングランド遠征軍を追って再び南下したとき、クラークが後に残されたことは、クラークの将来の経歴と運命にとって決定的だった。というのは、彼はその頃、スコットランドで指揮をとっていた代々の上級士官たちの秘書官となったからである。クラークは明らかに、その前年、スコットランドを離れようと試みていた。すなわち、一六五〇年秋、上級士官の一人（チャールズ・フリートウッド、Charles Fleetwoodとジョージ・マンク、George Monkを含む）が、残部残部議会の軍委員会委員長に手紙を書き、その中で彼らは、アイルランドでの任に就こうとしていたと言われる年下の方のリチャード・デイン（Richard Deane）を継いで、クラークが秘書官となる。「そしてロンドンに戻る」申請を支持していた。この職を得るのに失敗したため、クラークの経歴全体は、一六五九一六〇年の冬まで、事実上、スコットランドに基礎を置くことになったのである。

一六五一年八月—九月、スコットランドに残されていた臨時代理の最高司令官は、職業軍人で元・王党派のジョージ・マンク、当時クロムウェルの軍需中將（砲兵隊）、だった。九月三日ウースターにおいてイングランドに侵攻した王党軍が敗北して間もなく、少将ジョン・ランバート（John Lambert）と、年上の方の少将リチャード・デイン（Richard Deane the elder）がマンクに合流した。ランバートは、その秋アイルランドで死んだヘンリー・アイアトン（Henry Ireton）を別にすれば、議会——共和国側の司令官たちの中で最も知的に優れた人物であり、デインはすでにある時期、提督すなわち海軍司令官として勤めていたことがあった。この強力な軍の三人体制（全員明らかに少将とし

て平等の地位にあった)は、たちまちスコットランド征服を完了した。八年後の状況とは異なり、この時には、ランバートとマンクの間^{あつれき}に軋轢や対抗の痕跡はない。それでもマンクは、一六五二年の初め、無期限の病氣休暇に入った。これは、本当に具合が悪かったのか、それとも唯一の最高指揮権が与えられないことに對する不満の、一種の心身症によるものか、疑問が持たれるゆえんである。実際、その後間もなく、ランバートはイングランドに呼び戻された。狙いは、ランバートがアイアトンの後を継いでアイルランドの最高司令官になることだった。副総督 (Lord Deputy) ではなかったが。その地位は、クロムウェルが三年間総督 (Lord Lieutenant) を勤め終えたとき、同時に廃止されたからである。残部議会の文民政治家たちによる、この一文惜しみの (penny-wise) 反軍的動きは、彼ら——ならびにイングランド共和国——に、いたく代価を支払わせることになった。デインは当時、一六五二年三月から翌年三月までスコットランドにおける唯一の最高司令官として残っていた。一六五三年三月、今度はデインが呼び戻された。連合州 (the United Provinces) すなわち、オランダ共和国のカルヴァン主義者仲間とイングランド共和国が行う海戦「第一次英蘭戦争」において、再び海軍の指揮を執るためである。同じ理由で、マンクも間もなく病氣休暇から呼び戻され、海上の任務に就かされた、か、あるいは、そうするように誘われた。これら二人「デインとマンク」は、英蘭両国抗争の後期の段階におけるイングランドの勝利に對し、少なくともロバート・ブレイク [Robert Blake 1599-1657] クロムウェルの下で王党派、オランダ、スペインと闘った提督」と同じくらい称賛に値する。そのときまでにデインは、一人の英雄が戦闘で死ぬのに遭遇していた。スコットランドにおける彼の後継者、従つてクラークの次の主人、は、その地に駐留していた先任の大佐だった。彼は、臨時代理の最高司令官の地位を享受していただけで、将官に昇進はさせられなかった。これも文民のけちの例で、またまた不幸な結果をもたらした。この新しい司令官はロバート・リルバール (Robert Lilburne) で、彼は、かの有名な平等派の指導者「自由民に生まれたジョン」 (Freeborn John) の兄だった。彼の家族は、ダラム州の小ジェントリーに属し、母方で宮廷とつながりがあった (ごくわずかだった)。一六四九年秋口

バートは、弟ジョンを反逆罪の裁判から免れさせる作戦の一部として、ジョンに彼の部下のうち最も強い者らを付けてアメリカに移住させる手はずを整えているところだったらしいが、うまくいかなかった。「ロバート・」リルバーンは勤勉で誠実な士官だったが、「正式の権威〔将官の地位〕を欠いていたためか、あるいは、その権威をうまく扱う戦術的理解力を欠いていたためかで、ハイランドに基地を置く親王党派・反イングランドの反乱が、一六五三年末から一六五四年初めにますます深刻になっていった。その間イングランドでは、一六五三年四月庶民院残部議会の支配が終わっていた。後を継いだのは、まず、Lord Generalとしてのクロムウェルで、彼は新しい、ほとんど軍人からなる國務会議(The Council of State)を率いていた。次に七月からは、指名議会、ないし、ベアボーンズ^ズ議会、二月からはクロムウェルの護国卿制である。護国卿制の主要な設計者はランバートだった。海戦終結後、再び半ば引退していたマンクをようやく説得して、スコットランドにおける指揮を再開させたのは、護国卿としてのオリバー・クロムウェルだった。不幸な前任者とは全く対照的にマンクは、単に総司令官としてではなく、護国卿自身を除けばブリテン島嶼^{とうじよ}でただ一人の、正規の最高司令官(Captain-General)として——かくして、フリートウッドやランバートらの同時代人の頭を飛び越して、——スコットランドにやってきた。

ウィリアム・クラークが秘書官にとどまっていた限り、彼はマンクに仕えて働いた。従って、クラークの経歴の中で最長の勤務は、一六五四年春から一六五九一六〇年冬まで、スコットランドにおいてマンクの下にいたときである。それに伴い、手書き文章の大半はこの時期のものである。マンクの最初の仕事は、ハイランド遠征を成功させ、ミドルトン・グレンケルン蜂起(the Middleton-Glencairn Rising)をうまく終わらせることだった。一六五五年スコットランドは新しい文民政府の下に置かれた。スコットランドの世論の少なくとも一部をなだめる試みの一部として國務會議議長(President)にブログヒル卿ロバート・ボイル(Robert Boyle, Lord Broghill)が就いたのである。かくして、一年余の間マンクは、もちろん國務會議の一員であったが、考えられる限りこの上なく友好的に、ブログヒルと権力を共有した。

その後一六五六年プログヒルは、護国卿第二議会の議席に就くため、スコットランドを離れた。彼は、国務会議の議長を辞任しなかったが、再び戻ることにはなかった。そこでマンクがもう一度、スコットランドの（事実上の）^{デファクト}軍事的支配者であるだけでなく、この世の統治における最重要人物となつたのである。国の統治者——一種の未公認の大守——として、マンクの第一の関心は常に安全保障だつたが、それは、クロムウェル護国卿体制に具体化されているイギリスの支配を、スコットランドが受け入れることを意味していた。最高司令官「マンク」や彼の秘書官「クラーク」がスコットランド国民——彼らの中で自発的な、まして熱心な協力者はほとんどいなかった——をどう考えていたかは、推測の域を出ない。スコットランド人が現状（*status quo*）の下でおとなしくしていることへの称賛が、われわれが見いだせる親スコットランド感情に最も近いものだろう。

一六五九年の政治的混迷が、マンク、ひいてはクラークを、イングランドの出来事の渦中に引き戻した。一部の歴史家たちは、早くも一六五九年夏にはマンクが隠れ王党派になつていたことを何とか証明しようとしてきたが、実際には彼は、リチャード・クロムウェルの護国卿体制の崩壊と、共和制によるその代替——再び長期議会（もともとは一六四〇年一月に選出された）の残部議会の下での——とを受け入れた。イングランド軍が五ヶ月前に回復していたまさにその議会を、一六五九年一〇月に二度目に解散させた後に初めて、マンクは、合法的な文民統治を回復するために、自分の軍を南下させ、介入することに決めた。こうした事態の展開がマンクを、かつての同僚ランバートとの対峙に導いたのである。ランバートは、スコットランド軍の南進を阻止すべく、大軍を率いて北上した。しかし、クラークは、再び戦闘の場にあわせることはなかった。ランバート軍が雲散霧消してしまつたからである。また、フェアファックスが引退生活から復帰し、ロバート・リルバーンおよびロバート・オーヴァートンに対決して、ヨークシャーをマンクに取り戻す手助けをした。ロバート・リルバーンはこのとき、一六五四年スコットランドから呼び戻されて以来ずっと維持してきたヨークでの任務に当たることになつていたのであるが、ロバート・オーヴァートンの方は、東ヨークシ

ヤー出身の共和主義者で、一度はマンクにより反クロムフェルの陰謀家として糾弾され、その結果、軍から罷免されていた（一六五五―一九年）が、共和国が一六五九年夏リチャード・クロムウエルの護国卿体制を再び継いだとき、ハルの司令官（Governor）としての任務に復帰させられたのだった。われわれが知るかぎり、クラークは一六六〇年二月の間、イングランドに南進するマンクに同行し、マンクがロンドンに入り、もう一度回復された残部議会（二月末からは再度名目上の政府となったが）と交渉を開始したとき、彼に随行していた。この段階においてさえ、マンクやクラークが、国王の帰還に向けて積極的に動くという意味で王党派だったかどうかは分からない。よりありそうなのは、彼らは事態の推移と共に動いたことである。王政復古への直接の前ぶれは、残部議会に対するマンクの憤激と、一年以上も前のブライド肅清以来庶民院から排除されていた議員たちの中で、召集できる生存者全員の再登院を残部議会に認めさせることにした彼の決断だった。マンクは今や総司令官、兼、三国における軍の唯一の最高司令官となり、アイルランドとスコットランドの部隊も彼の指揮下に入れられていた。かくしてクラークは、今や、そうした立場にあるマンクの主席秘書官となったのである。

王政復古についての彼自身の見解がどのようなものであったにしても、クラークは、その主人同様、国王帰還後、手厚く報いられた。彼は、新たに設けられた軍務秘書官（Secretary-at-War）のポストに就いた。このポストは、一九世紀に戦争遂行政府秘書職となるまで存続したもので、二人の国務大臣のポストよりは明らかに劣るが、しかし、統括すべき軍がある場合には、軍政上重要であった。クラークは、死ぬまでこの職を保持した。かつてはクロムウエル軍や王党軍であった連隊が二つを除きすべて、一六六〇―一六一年の間に給与を支払われて解体されたため、その職は、ただ一六八〇年代と、特に一六九〇年代の《ウィリアム戦争》の期間だけ、かなり重要なものになったにすぎない。皮肉なことに、クラークの早すぎる死をもたらしたのは、マンクへの彼の傾倒とともに、まさにこの新たに見いだされた彼の王党主義（royalism）だった。クラークは、一六六一年の戴冠記念叙勲でナイト爵に叙された。マンク自身の公爵位、ガ

ーター勲位、幾つもの政府要職、ありあまるほどの金と土地の贈与と比べれば、そのときまでにクラークがなつていた、緊要な《官房長》(chef de cabinet) に対する報酬としては過剰というわけではなかった。

第二次英蘭戦争(一六六四—七)は、イギリス側の侵略の明瞭な結果だった。マンク自身は、大抵の優れた職業軍人同様、決して戦争屋ではなかったが、いったん戦争となると、海軍司令官としての彼の信望と経験が、直ちに、再び求められた。そこでクラークは、一六六六年の血なまぐさい会戦の一つの間、旗艦の甲板で提督の側にいたとき、オランダ側の砲撃で片足を吹き飛ばされるに至った。彼は数日間生死をさまよったあとと亡くなり、ハリッチ教会(Harwich church)に埋葬された。そこには、彼の墓碑名が今でも見て取れる。享年わずか四三歳だった。記録上では、一六四八年の遅い時期に結婚し(妻ドロシー、彼女の旧姓はヒリアード)、幸せに暮らしていたが、彼より長生きした子供は一六六一年まで生まれなかった。その子は、回復された王政とクラークの新しい責任の輝きの中で宿された、と言える。実のところ彼の妻は、一六五〇年代の間ずっと、南部にとどまっていたようである。一六四八年の「親愛なるピリー」としてであれ、一六六〇年代の「ウィリアム卿」としてであれ、後世にとってのクラークの真の重要性は、当時の数々の大きな出来事に参与していた人としてではなく、記録者・収集者としてであった。

〔2〕 ジョージ・クラーク小伝

ウィリアム・クラークの息子で相続人のジョージ(一六六一—一七三六)は、そうなるのを人は予想していたかもしれないが、父と比べてもっとありきたりの人で、その上、その経歴も文書ではるかによく確かめることができる。更に、父とは異なり、老年になって自伝を書き、それが彼の他の書き物と共に今日まで残っているため、彼本人とその生涯についてのわれわれの知識を増やしてくれる。オックスフォードのブレズノーズ・カレッジで教育を受け、その後、

オールソールズ・カレッジのフェローとなった。彼はそのカレッジに非常に愛着を感じ、生涯そこつながりをもった。未亡人となったあとジョージの母は、賢明にも、マンクの義理の兄弟であるトマス・クラークス博士 (Dr. Thomas Clarges) の良き助言を得て、再婚した。ジョージ少年の義父となったのは、ウィリアム・クラークのかつての同僚でかつてスコットランドの軍の医長を務めたサミュエル・バロー博士 (Dr. Samuel Barrow) で、再婚の時には国王チャールズIIの宮廷医の一人になっていた。バローはまた、軍の法務官(軍事裁判所と軍規律を全般的に担当する)のポストも持っていた。その職務は一六八一年彼の継子「ジョージ」が後を継いだ。ジョージ・クラークは、一六八五年のジエームズIIの超「宮廷派」(ultra court) トーリー議会に、初めて議員として座った。しかし、他の忠実な反ホイッグの人々同様、これは彼が一六八八年に国王を見離し、一六八九年新しい君主であるウィリアムIIIとメアリーIIへの奉仕に加わることを妨げなかった。彼は二人を《事実上》(de facto) だけでなく《法的に》(de jure) 国王と女王と認めて、臣従契約をなしたに違いない。なぜなら、彼は単に職に留まったのではなく、昇進したからである。一六八九年ウィリアムIIIのアイランド遠征に際して、ジョージ・クラークは、軍務秘書官という父が昔持っていた職を継いだ。しかし、これが完全な、恒久的授与なのか、それともアイランド作戦の期間のためだけなのか、はつきりしないところがあった。実は、クラークのはライバルがいたが、その人はクラークよりもはるかに真剣かつやる気のある職業行政官で、ウィリアム・ブラスウエイト (William Blathwayt) といった。彼は後に、バースの真北のディラム・パーク (Dyrham Park) を建設した人であり、また、アメリカの植民地に対するイングランドの帝国行政史においても重要である。そして、ジョージ・クラークの職保有は、一六九〇年のアイランドからの帰還で事実上終わった。彼は一七〇五年までその職を辞任、あるいはその職を持つているとの主張の放棄、をしなかったようではあるが。女王アンの新しい治世になると、彼は初めは女王の配偶者、デンマークのジョージ、の愛顧を得、デンマークのジョージが海軍総司令官になると、その提督秘書官となった。その職は、一六七〇年、八〇年代に、サミュエル・ピープス (Samuel Pepys) が保有

していたものである。しかし、ジョージ・クラークは、庶民院において、彼のパトロンで主人であるジョージの望む通りに投票するのを拒んだため、愛顧と職の両方を失った。クラークは、一七〇五年からトリー党が権力の座に戻った一七一〇年——このときまでに、女王の夫君ジョージは死去——まで、オクスフォードに引退していた。一七一〇年クラークは、海軍弁務官 (Lord Commissioner) となり、そのポストを、ハノーヴァー朝となり、一七一四年の選挙でホイッグが勝利するまで保持した。その後は、大学を代表する国会議員に繰り返し再選されたが、学究的な引退生活を送った。

ジョージ・クラークは独身で、直接の相続人はなかった。彼は比較的裕福になっており、彼の愛するオックスフォードに自分のしるしを残そうとした。生前にも、また、死後も遺言による寄贈で、彼は気前のよい、そして偉大な恩人だった。大学自体とオールソールズ・カレッジ、クイーンズ・カレッジのほか、クラークは、ウースター・カレッジに特に関心を持っていた。そこは、最近まではグロースター・ホールだったところで、そのため完全なカレッジとしての地位を得ていなかった。この事実のために彼は、完全に出来上がっていたカレッジがそうできたであろうよりも更に多く、彼の関心をもつばら建築に向ける機会を与えた。彼はまた、イニゴ・ジョーンズ (Inigo Jones) の建築画と多くの蔵書も取得していた。ジョージ・クラークの本と文書は、明らかにそこで彼の晩年を暗くした、いわゆる〈内輪もめ〉がもしなければ、イニゴ・ジョーンズのものと同様、オールソールズ・カレッジに行っていただろう。

しかし、その内輪もめのため、それらは代わりに、ウースター・カレッジに遺贈された。ただし、保有していたもの内わずかのものを除いてである。そのわずかのもの、今なお完全には明瞭でない幾つかの理由で、彼の遺言執行人であるシッペン博士 (Dr. Shippen) を通して、リトルコートのパップム家 (the Pophams of Littlecote) その先祖の一人は、一六四九年ブレイク、ディーンと並ぶ第三の「海軍提督」だった) の手に渡り、そこから、そのほとんど全部が今世紀に入って主要なウースター・コレクションのために回復され、本版において再製されている。大抵の近代の大学卒

業生と異なり、ジョージ・クラークが大きな寄付をしていないように思われる唯一の学校は、彼自身が学部で学んだブレズノーズ・カレッジである。ジョージが彼の父のコレクションをどれほど、評価していたかは、はっきりしない。——ただ、子孫のためにそれらを保存し、彼自身、本や手書き写本を幾らか追加するぐらいはしたが。例えば、ほとんどの現代の読者にとって、最も注目に値する唯一のものである（パトニー）と（ホワイト・ホール討論）のテキストである2／7巻（ウースター手書き文書No. XV）を、ジョージ・クラークが読んだことがあるかどうか、われわれには知る由もない。

〔3〕クラーク手書き文書

クラーク手書き文書について記述し、それを評価するということは、秘書官、記録保存者、収集家としてのウィリアム・クラークを査定することである。彼の書類は、元々のメモや草稿、同時代の書き直し下書きと清書したもの、後の時期の写しなどを含んでいる。この第三のカテゴリに、軍における討論を一六六二年に筆写したもの（2／7巻、手書き文書LXV）は入る。しかし、大主教ロードの裁判（4／9巻、手書き文書LXXI）——後の一人の伝記作家により一度利用されただけである——は、何日分かの討議を大量に加えた、より知られた印刷版と実質的に異なるということも、指摘されるべきである。これは全部がクラーク自身の手で書かれている。これも、王政復古後に、同時代の大筋のメモか速記から書き写されたものであろう。これに匹敵するものは、裁判の完全な清書である。これは、五人の王党派指導者、ハミルトン公ジェームズ（イングランドの爵位ではケンブリッジ伯としての彼の資格で）、ホランド伯ヘンリー・リッチ、ノリッジ伯ジョージ・ゴーリング、サーサー・カペル卿、ジョン・オウエン卿、から成る第二最高法廷によるものである（2／10巻、手書き文書LXX）。ここでも、一番最後に、ハミルトンが斬首台でしたひとりよがりの演

説を除けば、すべてクラーク自身の手で書かれている。

筆者生としてクラークは、一つの非常に特徴的な、しかし、容易に理解できる習性を持っていた。時々、ある巻なし文書の大部分が彼の手で始められ、それから他の人々によって終えられている(例えば、1/1巻、手書き文書 XIV、すなわち、一六四〇年一月三日の庶民院議事録の部分の草稿、二つ折版、奇数頁のみ)。しかし、もつと多くあるのは、彼が写すか書き始めて、間もなく別の人、多分、副書記ないし筆者生、に渡してしまうケースである。しかし、クラークは、時々、自分自身の手で、その一番下のところに、元々のものの日付を書き込んでいる。(個々のものの真中ないし途中で書き手が変わる例は、2/3巻、2/4、4/1、ウースター手書き文書 XII、CX、CLXXXI)。一つの場合、小さな巻全部が他の人々の手になり、例外は、前扉内側に向かい合うクラークの速記一行のみである(1/2巻、手書き写本 XV)。これは1/1、XIVの継続で、一六四一年の、議会におけるストラフォード伯に対する訴訟手続である)。明らかにクラークは、軍討論の、彼自身の速記が非常に雑なメモを書き写したと思われる。というのは、彼がそれらを声に出して読み、書き取らせるのでなければ、他にだれも書き写せなかつたであろうからである——読んで書き取らせるやり方は、一連の過程で、退屈で誤りを生み出しやすい段階である。これも明らかなことだが、クラークはこの写しを、自分の公務の一部としてやつたのではなく、主要な国家裁判の記録を写すことと同じく、彼自身の興味と、多分、後世の読者のためにやつたのである。その意味で、それらは、イングランドあるいはスコットランドの軍の公的記録文書にはなく、彼の個人的な記録保管に属するものである。それらは、クラークが単に同時代のパンフレットとニュース本 (newsbooks) の熱心な読者だっただけでなく、それらの貪欲な収集者でもあつたという事実に関係づけられる。実際、ウースター・ライブラリーには、これよりずっと大きな、今ではもつと有名な、ジョージ・トマソンのコレクション——国王ジョージ III の莫大な寄付のお蔭で、現在は大英図書館の参考文献部門に納められている——にないものがいろいろと入っている。クラークが、軍総司令部にきたあらゆるトラクト、新聞紙を一部取っておこうとしたか

どうか、あるいは、他のいろいろな基準があつて、自分でパンフレットを買い求めていたかどうか、は明確ではない。彼の手書き文書のコレクションに戻ると、内戦以前には、常設の軍事行政部あるいは秘書部は存在していなかった。また、一六四五年のニュー・モデル軍の創設以前には、中央の軍秘書がいた証拠はほとんどない。従つて、ラッシュワース、クラーク、および彼らの同僚たちには、書類を書き提出するための先例がなく、彼らが従うべき記録記入のモデルがなかった。実際彼らは、彼ら自身のシステムを即席に作らねばならなかった。そうしなければ何もなかった。もし、クラークは以前ラッシュワースの下で議会事務局に属していたという推測が正しければ、その場合、それが、文書の提出と保管の点で一番近い先例を提供していただであらう。この頃のもう一つの制度にかかわる特徴で、それがあつたおかげで議会の、すなわち、当時の共和国の、軍にかかわる多くの記録が残っているのは、国事記録 (the Accounts of the Kingdom) 委員会と、そのさまざまな後継部門および関連部門とである。その結果保管されたのが、多くの記録、数えきれぬ命令書、更には少数の召集名簿などである——それらは誤つたタイトル「共和国財務府文書」(Commonwealth Exchequer Papers) の下に保管されている。しかし、幾つかの地方民間委員会——大抵は王党派に対する罰則課税を取り扱い、その活動記録を「国事」記録委員会に提出することが求められていた——を除けば、クラークの保管文書に匹敵する、財政以外の性格を持つものは、一六五〇年以降のイングランドの軍に、あるいは一六四九年以降のアイランドの軍に、事実上何も存在しない。更に、スコットランドの司令官たち、とりわけマンク、と彼らそれぞれの副官たちは、その地の軍から自分たちの記録を提出しなければならない義務を大幅に無視したので、一六五二—五九年のクラークの文書はスコットランドにおける軍の財政についてのものを多く含んでいる。イングランドの軍の財政記録が残っている場合には、それは国務書類 (the State Papers, SP28その他) か、国立公文書館の財務府記録 (series A01, E101, E351) にある。クラーク・コレクションのどの文書の実際の形態であれ、それが議会の記録保管技術 (draughtman-ship)、すなわち記録の残し方に直接影響されたのかどうかは、かなり専門技術的な問題である (当編集者にはそれに

答える用意がない)。可能性として考えられるのは、まず全部を速記と大まかなメモで記録し、それから第一草稿を作成、次に後できちんとした文書にする、というやり方です。クラークが文書に日付を付すとき下部の代わりに上部に、もしくは下部と上部の両方にする習慣は、当時の他の中央政府の記録(例えば、国内外に関する国事文書、あるいは枢密院の書類)よりも議会のものにより近い。

クラーク・コレクションの内容は、それらの形態よりもはるかに興味深い。彼の文書は、一七世紀中葉の英国史の三つの主要な領域ないし側面に対し、ユニークで、膨大な資料を提供する。

一、一六四〇年代から六〇年代の全般的な政治的展開、特に、一六四七年―四九年、および一六五九年―六〇年における軍の政治的役割

二、軍の内部の組織と人物、スコットランドについては軍の財政も

三、一六五二年―六〇年の強制的統一期間におけるイングランドのスコットランド軍事占領と、そこでの共和国による支配

一八九〇年代にC. H. Firth, 一九二〇年代、三〇年代にGodfrey Davies, 一九三〇年代にA. S. P. Woodhouse, それ以降、現在の編集者Dr. Blair Worden, および、さまざまな未公刊学位論文の執筆者たちを含む多数の歴史家たちがクラーク・コレクションの手書き文書を利用したことは、それらの文書の歴史的価値と永続的な魅力を立証する。しかし、コレクションの資産と潜在的効用が利用し尽くされたとは到底言えない。従って、国立公文書館の種々のシリーズ(Harvester Press社のマイクロフィルム・プログラム「イングランド内戦と空位期の未公刊国事文書I―V部」で、その多くが入手できる)、大英図書館および大西洋両側(そして世界中至る所)の他の図書館にある印刷されたパンフレットと新刊本、ボドレー図書館所蔵のローリンソン・コレクションにあるThurloe写本、加えて、同じ時期の地方史の多種多様な資料、などと一緒に用いられるならば、クラーク・コレクションは、将来の歴史家たちが、今日の人々も

含む彼らの先駆者たちの仕事に改善を加え、新しい探究の全分野を切り開くための基礎を提供する。

個人的なメモ、文通、ニュースレターが他のいろいろなものに混じっているかぎり、正式の行政上の記録、特に財政記録の無味乾燥さは、個人的なタッチによりしばしば緩和され、活気を添えられる。さまざまな出来事において自分がとった姿勢や役割に関して示したクラークの慎重さについて本小論の中で既に言われたことにもかかわらず、このコレクションは、本質的には、単なる機械的な写字生兼記録者以上の人の文書である。それらは、一人の知識人、更には鋭敏な観察者、人間の営みの悲喜劇を自覚し、また歴史的運命の感覚を備えた人、の精神と、また、義務への献身とを反映する。彼は、「顔なき官僚」や「水分なき計算機」ではなく、当時の彼の主人たちだけでなく、あらゆる時代のための秘書であり、記録保管者なのである。

II. エリック・サムズによる「ウィリアム・クラーク卿の速記」

(原文二九―三四頁)は省略

III. 内容と照合表

巻の配列

ウースター・カレッジ図書館のウィルキンソン室に置かれているウィリアム・クラーク手書き文書の元々の諸巻は、

同カレッジの手書き文書コレクション全体の間を散財し、大きき、カレッジに入った日付、棚の上の位置により、大まかに並べられている。

本版のために、それらの諸巻は、歴史的により一貫した順序に置かれた。ウィリアム・クラークが残した文書は、主に、一六四〇年〜一六六四年の軍、議会、スコットランドにおける軍の事情を扱っている。ここでは、諸巻は、内容により四つのグループに分けられた。

第1グループ 一六四〇年〜一六六四年の、軍および軍関係事項に関する手紙と文書 (22巻)

第2グループ 一六四〇年〜一六六〇年の、軍、軍の議会との関係、および、パトニー、レディング、ホワイトホールなどにおける討論を含む、軍の議事、について扱った手紙と他の文書 (13巻)

第3グループ 一六五二年〜一六六五年の、スコットランドにあった軍と総司令官としての將軍マンクにかかわる
信書控え帳、命令書、任官辞令、出入許可証の抄録・その他の資料 (12巻)

第4グループ 種々雑多のもの。厳密にはウィリアム・クラーク・コレクションの一部ではないが、それと非常に密接な関係があるため入れられた、書類も含む、綴じられていない文書と巻。

どのグループの場合も、諸巻は時系列に並べられている。

諸巻の番号

本照合表においては、諸巻にはそれぞれのグループ内で連続した番号が打たれ、各グループの番号が冒頭に付されている。従って、第1グループの第1巻は1/1、第2グループの第3巻は2/3、といった具合である。ウースター・カレッジの元々の番号の打ち方に当たりたい読者の便宜のため、その番号は（ ）内にローマ数字で記されており、エディンバラ・財務府番号も（ ）内に（4/3巻と4/8巻のみ）記されている。

第1グループ：1640年～1660年の、スコットランドにあった軍と軍関係事項に関する手紙と文書

マイクロフィルム・リール1

- | | |
|------------|--|
| 1/1 (XIV) | 1640年～1641年の、議会資料の写し（これらの写しはウィリアム・クラークにより、あるいは彼のために作られたとすれば、それらは恐らく、それらが扱っている出来事の数年後に用意されたのだろう）。 |
| 1/2 (XV) | 1640年～1641年の、議会資料の写し。 |
| 1/3 (XVI) | 1648年11月～1649年11月の、軍、および軍の議会との関係に関する受領した手紙、差出した手紙の写しとその他の文書（若干、少し後の時期のものも入っている）。 |
| 1/4 (XVII) | 1649年11月～1649/50年1月の、軍、および軍の議会との関係に関する受領した手紙、差出 |

- した手紙の写しとその他の文書、しかしイングランドにある軍にもつばらかかわる。
- 1/5 (LXXII) 1648年12月～1649年夏の、各地の駐屯地における士官会議の議事録。末尾の何頁かは、個々の駐屯地についてのメモを含む。
- 1/6 (XVIII) 主に1649年～1650年だが、一つだけ1664年の日付となっている、個々のピューリタン(牧師とそれ以外の人たち)の間の手紙の写し、ロンドンの士官たちと各地の駐屯地の士官たちの間の手紙と声明書の写し。

マイクロフィルム・リール2

- 1/7 (XIX) 1651年5月～9月の、スコットランドにあった軍への手紙、軍からの手紙、そこでの議事録、速記による記載がこの巻から始まる。本巻は、上記の時期よりも後に集められたものというより、同時期の手帳のようなもの。この巻の最後の頁は、1651年8月のクロムウェルとイングランド軍本隊の帰国後、将軍ジョージ・マンクがスコットランド総司令官として活動していた時期をカバーしている。
- 1/8 (XX) 1651年10月～12月の、スコットランドにあった軍にかかわる手紙と他の議事録の写し。本巻全体は、1651年8月のクロムウェルとイングランド軍本隊の帰国後、将軍ジョージ・マンクがスコットランド総司令官として活動していた時期をカバーしている。
- 1/9 (XXI) 1651年9月～1651/2年1月に、スコットランド、ほとんどすべてはグンディー、で開かれた軍事法廷の記録。他のそのような審理についてのメモが、シリーズの他の諸巻に時系列の場所にある(例えば、巻1/7、1651年5月には、元レベラーのエドワード・セクスビーについての

もの)。

- 1/10 (XXII) 1651/2年1月～1652年7月の、スコットランド内での手紙。これは、将軍マンクが無期限の病気休暇で去ったあと、初めは、少将同士のジョン・ランバートとリチャード・ディーンが共同で、その後ディーンが単独で、スコットランドにおける総司令官として活動していた期間をカバーしている。C. H. ファースによれば、速記による記載は、スコットランドに連合を押しつけるために派遣されたイングランド議会特命委員たちの議事録である。速記でない内容の一部は、確かに、特命委員たちの活動に関するものである。
- 1/11 (XXIII) イングランド軍を維持する助けとしてスコットランドで徴収された財産への直接税の査定額に関するメモ。本巻は1652年だけカバーする。同じような資料は巻3/5に見いだされる。

マイクロフィルム・リール3

- 1/12 (XXIV) 1652年8月～1652/3年の、スコットランドへの、またスコットランド内の、手紙と他の文書の写し。1653年の初め、ロバート・リルバーンがリチャード・ディーンを継いでスコットランドにおける総司令官となった。しかしリルバーンは、少将への昇進に反対が出て大佐どまりで、ディーンと同じほどの公式の権威はなかった。
- 1/13 (XXV) 1653年3月～1653年12月の、スコットランドへの、またスコットランド内の手紙の写し。
- 1/14 (XXVI) 1652/4年～1654年12月の、スコットランドへの、またスコットランド内の、手紙の写し。1654年4月にマンクは、総司令官、正規の大將として復帰した。
- 1/15 (XXVII) 1654/年1月～1656/7年2月の、スコットランドへの、また、スコットランド内の、手紙の

写し。

マイクロフィルム・リール4

- 1/16 (XXVIII) 1655/6年3月～1656/7年2月の、スコットランドへの、また、スコットランド内の、手紙の写し。
- 1/17 (XXIX) 1656/7年3月～1657年12月の、スコットランドへの、また、スコットランド内の、手紙の写し。
- 1/18 (XXX) 1657/8年1月～1658年12月の、スコットランドへの、また、スコットランド内の、手紙の写し。

マイクロフィルム・リール5

- 1/19 (XXI) 1658/9年1月～1659年9月のスコットランドへの、また、スコットランド内の、手紙の写し。特に、マンクへのものと、マンクからのもの。
- 1/20 (XXXII) 1659年10月～1659/60年2月の、マンクへの、またマンクからの手紙と書類の写し。これらの文書の性格は、1659年夏にマンクが全国的な政治にかかわるようになったことと、その年の10月、イングランドにいる軍の司令官たちと決裂したことを反映している。1659年冬マンクがイングランドに向けて離れた後は、スコットランド問題にかかわる内容はほとんどない。

マイクロフィルム・リール6

1/21 (XXVIII) 1659/60年3月～1664年6月の、スコットランドへの、またスコットランド内の、手紙の写し、および、議会資料の写し。

1/22 (XXVII) 1653年の、フランス旅行についての、ヨアヒム・ヘイン (Joachim Hane) の日誌

第2グループ：1640年～1660年の、軍、軍の議会との関係、および、パトニー、レディング、ホワイトホールにおける討論を含む、軍の議事録、について扱った手紙と他の文書

2/1 (CXI) 1640年～1641年の議会資料。主として、演説の写し。

2/2 (CXXII) 1640年～1641年の議会資料。

マイクロフィルム・リール7

2/3 (XLI) 1646年～1647年の、軍と軍の議会との関係にかかわる手紙と他の書類の写し。

2/4 (CX) 1647年～1647/8年の、軍と軍の議会との関係にかかわる手紙と他の書類の写し。

マイクロフィルム・リール8

2/5 (CXIV) 1648年～1648/9年の、軍と軍の議会との関係にかかわる手紙と他の書類の写し。

2/6 (LXVI) 1647年8月～11月の、将官委員会の議事録。トマス・フェアファクス卿は、この将官会議に

任命ないし推薦権を委任していたように見える。

- 2/7 (LXV) 1647年10月～11月の、軍総評議会とその諸委員会の議事録。後ろの方から、ホワイトホールとレディングにおける討論を含む、1648年12月～1649年3月、および1647年7月の、士官の総評議会議事録。
- 2/8 (XLII) 1648年9月～11月の、ワイト島、ニューポート交渉にかかわる議事録
- 2/9 (LXIX) 1648年～1649年の、トマス・フェアファックス卿の命令書帳。これらは、巻3/7～3/11まで(以下)の中にある命令書、任官辞令、出入許可書の抄録に類似している。

マイクロフィルム・リール9

- 2/10 (LXX) 1648/9年2月～3月の、高等法院 (the High Court of Justice) の議事録。王党派のジェームズ・アール (ケンブリッジ)、ジョージ・ロード・ゴアリング (ノリッジ)、アーサー・カペル卿、騎士ジョン・オウエン卿の審理。
- 2/11 (LXVII) 1649年の、イングランドとアイルランドにあった軍の、兵力、損害等にかかわる文書の写し。残部議会の軍員会のためにヘンリー・アイアトンが作成した〈編制〉(establishment) 草案、そして、後ろの方から、連隊により表にされ、多くの場合、請求された報酬額 (fees) を示す、1647年～1650年の間に交付された軍の手数料 (commissions) を含む。

マイクロフィルム・リール10

- 2/12 (LIII) 1659年～1660年の間に交付された手数料。もっと後の時期のものがごくわずかが入っている。

る。連隊長（大佐）と守備隊の地名により、アルファベット順に列挙されている。報酬額は記されていない。

2/13 (LXVIII) 1660年代の雑多な文書。マンクのアイルランド総督としての立場でのものや、彼の (Master of the Horse, 英国王室の第3位の官位) の立場でのものなど。

第3グループ：1652年～1665年の、スコットランドにあった軍と総司令官としての将軍マンクにかかわる信書控え帳、命令書、任官辞令、出入許可書の抄録、その他の資料。

3/1 (LXXXVI) 1653年の、ロバート・リルバーンの、スコットランド総司令官としての、手紙草稿控え書。

3/2 (L) 1653/4年1月～1655/6年2月の、初めロバート・リルバーンの、次にマンクの、信書控え帳。

マイクロフィルム・リール11

3/3 (LI) 1656/7年～1659年9月の、マンクの信書控え帳。1655/6年2月か～1656/7年1月をカバーする巻は現存しない。

3/4 (LII) 1659年10月～1659/60年2月の、マンクの信書控え帳。第1グループの1/19～1/21の手紙の場合同様、1659年、1660年のマンク自身の動きと彼の立場の変化が、本巻の内容に反映している。

3/5 (XLIII) 1652年～1653年の、スコットランドにおける査定額 (Assessment) の調達、徴集に関する、総司令官からの任官辞令、将校任命辞令など。1654年～1657年の、マンクによる命令書、ス

コットランドの歳入、歳出表。後の方から、スコットランドにある軍の規模、費用に関する文書。これには、1651年10月～11月に、イングランドとスコットランドにある軍のために議会が承認した編制と、その後の変更を含む。本巻はまた、1652年～1657年の、スコットランドにあった軍と財政に関する他のものも含む。

- 3/6 (ILIV) 1652/3年～1655年の、総司令官による、スコットランドにおけるお金の問題に対する命令書。
- 3/7 (LXII) 1654年～1659年の、マンクによる、スコットランドにおけるお金の問題に対する命令書の帳簿。

マイクロフィルム・リール12

- 3/8 (XLV) 1653年～1654年の、ロバート・リルバーンとマンクによる、命令書、任官辞令、出入許可書の抜粋。
- 3/9 (XLVI) 1654年～1655年の、マンクによる命令書、任官辞令、出入許可書の抜粋。

マイクロフィルム・リール13

- 3/10 (XLVII) 1655年～1656年の、マンクによる命令書、任官辞令、出入許可書の抜粋。
- 3/11 (XLVIII) 1656年～1658年の、マンクによる命令書、任官辞令、出入許可書の抜粋。

マイクロフィルム・リール14

- 3/12 (XLIX) 1658年～1665年の、マンクによる命令書、任官辞令、出入許可書の抜粋。前の二つのグルー

プの場合と同様、マンクが1659年夏に全国的な政治にかかわるようになってから、特に、同年10月イングランドにいた軍の司令官たちと決別して以後、文書の性格が変わった。

第4グループ：種々雑多のもの。厳密にはウィリアム・クラーク・コレクションの一部ではないが、それと非常に密接な関係があるため入れられた、書類も含む、綴じられていない文書と巻。

4/1 (CLXXXI) この巻数 [CLXXXI] は、3箱の綴じられていない手紙と書類を示す。

箱1：3束の手紙と命令書

- (a) 1647年～1651年。これらの手紙の少なからぬものが、綴じられた巻と重複しており、こちらの方が元々のもの、この重複はあらゆる場合に画一的ではない。例えば、ここにある1648/9年～1649年の、ニューカッスル・アポン・タインからの数通の手紙は、他のどこにも重複がない。
- (b) 1657年～1659年。これらは大部分、グループ1のロンドンからのニュースレターの元々のものである。
- (c) 1649年か～1660年。この種々雑多な文書のコレクション——一部はひどい状態である——は、1649年のジョン・リルバーン裁判の一部の写しを含む。

箱2：ここに入っているのは、1657年～1658年のニュースレター（1639年5月の日付のニューカッスル・アポン・タインからの一通の手紙もあるが）、短期議会についてのもの（近代に付けられたインクのマークのしるしが付いている）、ジェームズ。治世の星室庁のケースと、多分18世紀の、わいせつな好色文学の一部についてのメモなどである。

マイクロフィルム・リール 15

4/1 (続き)

箱3：ここに入っているのは、ほとんどは1654年～1656年のニュースレターだが、1647年～1649年のものが少しと、まだアイルランドにいたときの、マンクからトマス・フェアファックス卿にあてた初期の一通の手紙もある。

4/2 (CCXVII) 1643年の軍への支払い額。

4/3 (CCX) 1627年以降の、Kenelm Digby 卿の日誌と他の書類。

4/4 (CCLXVI) 1647年～1651年に関するリトルコートから来たポッパム家手書き文書。綴じられていない文書、1箱。

マイクロフィルム・リール 16

4/5 (CCLXVII) 1615年～1720年のリトルコートから来たクラーク手書き文書。綴じられていない文書。

4/6 (CCXIV) クラーク文書についてのファース教授のメモを含むノート。これは、この種の数冊のノートのうちの一冊にすぎないが。この中に含まれているのは、幾つかの写しや、例えば、パトニー討論で彼の共感を覚える箇所がどこかを示すコメントなどの鉛筆書きのメモである。

4/7 (Adv. MS35.5.11) 1648年/1660年の、主に、イングランド北部とスコットランドにあるイングランド軍の人々からクラークおよびマンクにあてた手紙。1648年の手紙は、ほとんど、スコットランド遠征とポンテクラフト[イングランド・ウェストヨークシャーの町]攻略に関するものである。

1659年の手紙は、軍事的、政治的問題を扱い、コールドストリームにおけるマンクの声明文の原稿を含む（エディンバラのスコットランド国立図書館にある巻）。

マイクロフィルム・リール17

4/8（財務府MS782） 1646年～1659年、ウィリアム・クラークが務めていた種々の議会軍の諸費をつけた彼の会計簿。項目は主として、給与、旅費、手当て、馬、その他、情報や財産への損害の保障、軍事その他の工事費などに支払った諸雑費（この巻についての詳しい記述は、ロンドンの国立公文書館、報告番号1816に見いだされる）（元々の巻は、バッキンガムシャーにある首相地方官邸（Chequers Court）図書館にある）。

4/9（LXXI）付録 1643年11月～1644/45年1月の、大主教ロードの裁判の写し。恐らく、これは、クラークがラッシュワースの補佐をしていたとき、クラークがとったノートから写したもの。他の印刷された裁判の記述と細部で異なる。